



特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡Ⅻ

昭和55年度
発掘調査
整備事業概報

福井県教育委員会
朝倉氏遺跡調査研究所

は じ め に

昭和56年1月には、38年の豪雪に匹敵する大雪に見舞れ、各方面に多大の被害が生じましたが、さいわいにして55年度の発掘調査ならびに環境整備事業も無事終了しましたので、その概要を報告することいたしました。

本年度も新設県道予定地の発掘調査がありましたが、昭和52年度からの朝倉氏遺跡発掘整備事業第3次5箇年計画に基ずく発掘調査は、50年度に調査しましたサイゴ寺跡の南側で行いました。

この地区にも寺跡らしき屋敷跡と、その周辺にこれまでも確認されている間口6mほどの小さな屋敷跡が多数検出されました。これらの屋敷の多くは、せまい袋小路に面して配置されており、京都の裏町を連想させるものがあります。

これまでのように井戸や石積施設が多数発掘されましたが、炉跡もいくつかみつかりました。中には炉辺が土間で藁が敷かれていたらしく、藁と粘土が何層も互層になっていました。庶民の生活の様子がしのべれます。

環境整備事業では、発掘後長い間放置してありました出雲谷地系の屋敷跡を、ようやく芝張や高木植栽で整備することができました。

また昨年度発掘調査しました下城戸地系の屋敷跡は芝張で、北側の外濠跡には水が滞水するよう整備し往時の下城戸の構造が想像できるようにしました。そのほか赤濁地系の屋敷跡や館前の仮駐車場の周辺も整備し、年々増大する見学者の利用の便に供しました。

と、お、今年度の事業の実施にあたり、種々御教示、御協力をいただきました文化庁、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査研究協議会、福井市教育委員会など関係各位、及び城戸ノ内町をはじめとする地元の皆様から感謝申し上げる次第であります。

昭和56年3月

朝倉氏遺跡調査研究所所長

藤 原 武 二

目 次

はじめに

第40次調査	1
その他の調査	10
環境整備	11
花粉分析調査	13
研究所要項	22

P L. 1～6 第40次調査・遺構

P L. 7～13 第40次調査・遺物

P L. 14 第37次調査・遺構

P L. 15, 16 環境整備

P L. 17～19 花粉分析調査

第 1 図 発掘調査・環境整備位置図

第 2 図 第40次調査・遺構全測図

第3～6図 第40次調査・遺構

第7～11図 第40次調査・遺物

第 12 図 下城戸外濠跡整備図

第 13 図 出雲谷屋敷跡整備図

第 14 図 朝合氏遺跡周辺植生図

第 15 図 花粉分析調査地位位置図

第16, 17図 優占植物図

第 18 図 樹木・草本花粉割合図

第 19 図 花粉分析結果一覧表

第 40 次 調 査

第40次調査は、福井市城戸の内町字奥間野地籍の北半約 3000m²について昭和55年7月1日から開始した。調査は不順な天候のため予定より遅れているが上層については一応終了したので報告する。

調査地区は、17次調査区の南と、36次調査区の西とに隣接しており、両調査での知見をふまえ、南北道路の行方や、町屋と思われる小規模屋敷跡の構造、並びに町割の変遷の追求に調査の主眼をおいた。なお、床土を除去した段階で検出した遺構面を仮りにIイコウ面とする。層序関係については下層の調査終了を待って記述したい。

発掘された遺構

発掘された主な遺構は道路4、石組溝18、礎石建物9、井戸10、石積施設14、炉4等である。この調査区は東西道路S S 493を基軸にして、道路や溝によって大きく3～4地区に分けることができる。①S S 1564より西の小規模屋敷群の地区、②S S 1565とS D 1574以西の広い屋敷、なおこの地区からS D 1572とS D 1571に限られた③地区を区画することができる。④S D 1574以東の小規模屋敷群の地区で、この地区は広い道路S S 493に面する小規模屋敷群①と、川沿いの幹線道路S S 495から入り込んだ小路S S 1566、S S 1567に面する小規模屋敷群②に分けることができよう。以下各地区ごとに記述する。

S S 493 この東西道路は南北の幹線道路S S 495に直交し、何度か改変を受けているが、本来的には「サイゴ一寺」前の幅が示しているように幅約7.2m、両側に幅約45cmの石組溝が付き、合せて8.1m幅で計画されている。しかし、かなり早い時期にS D 500以東は道幅約4.5mに狭められ、北側側溝も廃止される。また西寄りの山裾の屋敷へ登っていく部分(約15m)も幅が3.5mと狭くなっている。この登り坂の一部に階段状になった四枚の笏谷石があった。登り坂の部分を除いては、道路の中程幅約2.4m分だけに砂利が敷かれている。

S D 501・1590 この石組溝は山裾よりS D 1580まで約65mあり、途中S D 1567、S D 500とS D 1571、S D 1572が合流する。上層までの調査では、S D 1574が合流する地点から東7m分が不明で、この付近は後世の排水管が走っており、また焼土も厚く堆積して後世の攪乱が予想される。しかし、S X 1672、1673がS D 1590の延長線上にあり、最終末の時期には溝のこの付近が埋められていた可能性も考えられる。

A区 S S 1564は東西道路、S S 493に直交する幅約1.8m (S D 1568を含む)、長さ約19.2mの袋小路で、全面に砂利を敷き締めている。小路に関連して自然石3枚からなる石橋S X 1623がかかっている。この小路以西3区画からなる小規模屋敷群がA区である。北端の小規模屋敷

は、隣りとSD1568で区画されている。間口は約4.7m、奥行9mを測り、道路より一段高くなっている。内に3.8m×7.4mの礎石建物SB1550が建っている。建物内には洗場と推定される石敷遺構SX1635と、その西側に円形の笏谷石製の炉がおかれている。内部には灰が詰まり、底部中央は火を受けて黒くなっていた。この屋敷は面積が41.5㎡しかなく井戸・石積施設を有しない点からも谷内でも最狭の屋敷であろう。

中央の屋敷は、北側とは溝、南側は石列SX1642で区画されている。間口11m、奥行10mを測る。内部は削平されていて建物の規模は不明である。井戸SE1594が屋敷の中央前寄りに、石積施設SF1604が北西隅にある。山裾の岩盤を掘っているため奥側を除く三方にだけ石を積んでいる。内部は西側から崩れ落ちて来た山土で埋っていた。井戸には洗場SX1640が附随し、排水用の石組溝SD1569がつく。井戸の西に炉SX1713があり、底に粘土を敷きつめ、周囲を越前焼の甕の破片で囲い、中に灰を入れる構造になっている。

南端の屋敷は、間口約9.5m、奥行8mと推定されるが、間口については南の区画があまり明瞭ではない。井戸SE1595と石敷の洗場SX1644が東に突出する。井戸は踏石が中央近くまで迫り出して水が汲みやすいようになっていた。

B区 西は道路SS1564によってA区と、東は道路SS1565と石組溝SD1574によって区画され、さらにレベル差と石組溝SD1572によって区切った地区で、南側へは今回設定した調査区域を越えて広がる一つの広い屋敷跡である。

道路SS1565は、東西道路に対してやや西に振る形で接続し、幅2.1m、長さ17.7mを測る。この道路はおそらく、谷を南北に貫く幹線道路の一つではなく、広い屋敷の裏門に通じる取付け道路であろう。

屋敷内には中央部と北西隅に2棟の礎石建物が存在する。どちらもかなり削平されており、不明な部分もあるが、残存している礎石やその抜き跡から規模を推定すると、北西隅のSB1555は東西10.4m(5.5間)・南北9.5m(5間)の建物で、柱間寸法は約1.89m(6尺2寸5分)を基準にしていると考えられる。建物内中央北寄りに井戸SE1596が掘られ、その北西側は小砂利敷になっていた。建物の南に石積施設SF1605がある。規模1.5m×2m、深さ1mで、約半分は使用中に埋まり、黒い有機質土の中に角材や荒く面取りをした材に混って瓜、梅、胡桃等植物の種子が多く含まれていた。石積施設に接して3m×3mの範囲に石敷SX1652が見られるが、石は大小不揃いである。建物の東に接して、井戸枠を転用した笏谷石で三方を囲み、内に石を敷きつめた洗場SX1662がある。ただし、この洗場は元来礎石の基盤面より一段下っていたのか、それとも基盤になっている焼土の下になっていたのかは畔の段に位置していたため不明だが、おそらく後者であろう。

B地区のほぼ中央に礎石建物SB1556がある。この建物も礎石の数個以上が抜き取られており、東辺の礎石列が不明である。規模は東西12.4m、南北9.5mと推定される。礎石が比較的

よく残っている西から3列目の柱間寸法は一間1.89mと測定され一間6尺2寸5分を基準寸法としているらしい。建物の方向はS B1555同じで、道路S S1564に規制されている。この礎石建物は位置や規模から、この屋敷の中心的な建物であろう。S D1570はS B1556に付属する雨落ち溝で溝石はほとんど抜かれていたが、溝内には焼土が入っていた。建物の北に井戸S E1598がある。西と北が石敷になっており石組溝S D1572に排水されると考えられる。建物の東側に大きい伏石と小砂利敷S X1670があり、24次調査のS G829の例から庭園の可能性も考えられるが、削平され他に石がないので推定の域を出ない。

B区は、石積施設S F1606付近と発掘区南端近くから一石五輪塔や石仏がまとまって出土しており、寺院跡とも推定されるが、隣の「サイゴ一寺」跡と比較すると、寺院に関係する他の遺物の出土例が少なく、まだ南半が未発掘であるため速断できない。

C区 石組溝S D1571とS D1572によって区画される地区で、B区より50cm程低い。おそらく中程の石組溝S D1573で二分され間口約6m、奥行16mと12mの小規模屋敷が2単位存在していたのであろう。西側の小規模屋敷は井戸S E1597と石積施設S F1608とS F1609を有する。S F1609は中央に紐で編んだ丸竹を入れて二分している。この石積施設と井戸を砂利敷の通路S S1629が繋いでいる。屋敷内の建物S B1557については、両側礎石の一部が溝石S D1571を兼ねており、7.5m分残っている。東側の屋敷は、間口約7m、奥行約16mで東側中程に石積施設S F1610がある。東と南の石積を欠き、内部は黄色土で埋められていた。建物については全く不明である。

D区 S D1574以东の小規模屋敷が並ぶ地区で屋敷の方向や道路との関係で二分もしくは三分することが可能であろう。東西道路S S493に面する3単位の小規模屋敷群をD区とする。西側の屋敷は間口7m、奥行13.5mで奥が広がっている。井戸S E1599、炉S X1674を有し、石積施設はおそらくS X1675で後に破壊されたのであろう。炉は三方を笏谷石、一方を河原石で囲んだ長方形で計測値は長さ1.4m、幅0.75m、深さ0.3m、0.2mである。底は二段になっており、高い部分は笏谷石が敷かれ、内には焼土と灰が詰っていた。屋敷中央に石組溝S D1577があり、その両側は粗い小砂利敷になっている。この溝を境にしてレベルが異なり北側がやや低く、時期を異にするのであろう。建物については全くわからない。この屋敷前付近は、道路側溝S D1590が不明になっており、下層のチェックが必要だが、S X1672、1673が側溝を覆う形になっている点が留意される。

中央の屋敷は間口約6m、奥行約14mを測り、井戸S E1600と石積施設S F1611、S F1612を有している。井戸は石組溝S D1579に接するように在り、口径が60cm弱と非常に小さい。S F1612は一方に木が使用されている点がかこれまでの石積施設とは異っている。S F1611は小砂利で覆れた状態になっており、この石積施設を廃棄した後、S F1612を使用したと推定される。奥側の隣り屋敷とは障壁S A1618が境になっている。

東側の屋敷は、中央のそれと同じく間口約6m、奥行14.5mを測り、井戸SE1601と石積施設SF581を有する。この屋敷の特徴は2間×4間の小建物SBが敷地の西側に寄って建てられていること、石積施設SF581が敷地の奥まった所ではなく、入口近くに設置されている点である。屋敷内が焼土で整地されているためかSB1559の礎石の周りに黄色粘土を帯状に敷き固定している。井戸SE1601は周りに石敷があり、井戸と洗場が結合している。

D₂区はD₁区の背後に位置し、川沿いの幹線道路SS495より入り込んだ小路SS1566・1567に面した東向きの2区画である。この小路は幅約1.5mで砂利敷になっている。二軒の屋敷は間口約7m、奥行約16mと推定される。北側の屋敷は東側の境が明瞭ではない。中央付近に井戸SE1602と少し離れて石敷SX1686が見られるだけである。南側の屋敷のIイコウ面は削平されて礎石等は残っていない。図示されている礎石建物SB1560、石敷施設SX1694等は一時期古い面の遺構で、細い粘質土で整地した上に礎石を据えている。建物規模は5.6m×9.4mである。これまでの建物は入口に寄せて建て裏を広くあけていたのに対し、この屋敷は前を約6mあけている。建物の東南に砂利敷面があり、その東には茶掘の溝SD1593がある。内部には屋根材と推定される炭化した板と葦の束が埋っていた。土壌SK1627・1628が溝の前にあり、中は黒い焼土で埋っていた。土師質皿を中心に多量の遺物があり、藤色をしたガラスの小皿片が出土した。この屋敷は建物はしっかりしているのに井戸、石積施設がない点が注目される。

発掘区東南隅の二区画は完掘されていないので方向がわからないが、ある時期には石組溝SD1586が両屋敷を区画していた。東の屋敷は幅約6mで中央部に4個の礎石が見られ、その東側には笏谷石製の炉SX1701がある。炉付近は土間で藁が敷かれていたらしく、藁と粘土が何層も互層になっている。

東南隅の石積施設SF1617から金隠と思われる板が出土し、これまで石積施設のあるものは便所ではないかと推定してきたが、この金隠の出土はこれまでの推定をある程度裏付けるものである。

今回の調査の成果は、①本来B区の範囲内（下層の調査を待たねばならないが）に、小路を作るなどして、その一部を切り取る形で小屋敷群A区及びC区を造成していると推定されること、②A区北端やC区東側の屋敷D₂区のように井戸や石積施設を持たない屋敷が存在することの2点である。これら2点は18次・29次・35次、36次（未報告）調査で明らかになったような主要道路に面し、石組や石列ではっきりと区画され、井戸・水甕（36次調査のみ）、炉、石積施設（便所）を有する小規模屋敷に比較して、構造上独立性を欠いているように思われる。そうした観点に立てばA・C区の居住者は、B区の屋敷の主とは、従属関係が想定できるかもしれない。ただ、こうした小規模屋敷の性格については、今後の調査例の増加を待つと共に、町割全体の中で文献の成果などもふまえて考えていきたい。

発掘された遺物

第40次調査で出土した遺物は、越前焼を中心として瀬戸・美濃焼、土師質土器、青磁、白磁、染付などの日常雑器がその大半をしめ、中国製、朝鮮製、日本各地で製作されたもの、その他産地不明の焼物なども若干個体出土した。陶磁器以外では、金属製品、木製品、石製品なども比較的多くみられた。ここでは、現在も下層の調査を継続して行っている都合上、耕土を除去した面（床土上）と、床土を除去した面（便宜的にIイコウ面と呼ぶ）とから出土した遺物に限って報告することになった。なお、越前焼に関しては未整理のため今回は省略する。

今回の調査では、溝や石列で区画された小規模屋敷の敷地内における遺物の出土量を把握するため、S B 1550、S B 1559、S B 1560の3建物をとり上げ、その出土破片数を調べてみた(第1表)。井戸底の遺物を検出できなかったことや、側溝へ転落した遺物、整地や削平によって移動した遺物が多くみられる所から確実な総破片数は期待できないが、この数値はおおよその目安としては妥当のように思われる。

	S B 1560		S B 1559		S B 1550			S B 1560		S B 1559		S B 1550	
	床土上	Iイコウ	床土上	Iイコウ	床土上	Iイコウ		床土上	Iイコウ	床土上	Iイコウ	床土上	Iイコウ
越前 甕	60	128	197	170	26	19	鉢			1			
壺	32	159	76	307	15	2	杯			2			
鉢	9	25	20	20	5	13	他		1				
摺鉢	36	139	62	76	10	9	白磁 碗	1					
卯皿		1					皿	27	78	101	197	6	
灰釉 鉢	2	14	16	15	1	5	杯		1				
鉢			2				香炉						1
香炉		1	1				その他の陶磁器	5	2	24	25	5	2
銅緑釉					1		金属 銅銭	1	32	7	9		
鉄釉 碗	8	16	12	13	1	5	鉄釘		4		2		
壺	10		2				銅箸		1				
他		33	7	5			鉄片	1	3	6	2		
土師質 皿	14	619	122	343	5	60	石 バンドコ	5	10	13	7	2	
土釜			3		1		硯			2	1		
土鈴		1		2			白	1		1			
他		1					磁石			2	7		1
青磁 碗	2	8	16	20	1	1	鉢・他	30	4	24	1	3	
皿		10	32	118	2	1	石仏		1		1		
鉢		1					木 傘口クロ		1				
香炉				2			漆塗り樽		1		1		
他		3	7	15	1		ガラス 皿		2				
染付 碗	3	11	12	12	4		水晶 数珠				1		
皿	9	32	43	60	1	3	墨				1		

第1表 小規模屋敷内の遺物出土破片数

瀬戸・美濃焼 (PL. 7 第7図)

灰軸は皿が多数をしめ、それに若干の碗、香炉、鉢、壺が出土した。皿(3・8)は、直径11.3cm、高さ2cmで全体に軸が施されており、口縁は少し端反りで見込みに菊の印花が押されている。底部には輪状の目跡もみられる標準的なものである。直径8.5~9cmのやや小ぶりの皿も多く出土しているが、これらには端反りのものは少なく、見込みに梅やカタバミの印花を押し込んだものがみられる。他には(6・7・9)のように、直径11.2cm、高さ2.6cmのやや古手で腰に稜が回り端反りが強く、腰下はへら削りで見込みに印花はなく3個の目跡を残す皿や、内側に花卉状の彫文を刻んだ罍縁の皿なども出土している。碗(1)は直径16.4cm、高さ5.7cmの平碗と呼ばれているものであるが、15世紀の標準とされている平碗が糸切底で腰下部が無軸であるのと相違して、これは全面に軸が施されており底部が非常に薄いため高台を削り成形したと考えられることから、それよりも後出のものと思われる。他に、直径12.5cm、高さ7cmで青磁の蓮弁碗を写したのも1点出土した。

銅緑軸のかかった皿は4個体分出土した。(11・12)は、見込みに菊の印花が押されており底部には輪状の目跡がみられる。現在銅緑軸の皿は岐阜県の妙土窯でその類別が知られている。

鉄軸は碗がほとんどで、他に皿、壺、茶入れ、水注、花瓶などが出土した。碗(15)は直径8cm、高さ4.6cmの小ぶりのもので、皿(20)は高さ2cmの全体に施釉された小皿で、肩に稜が回っている。(23)は口径12.8cm、高さ39.3cmの四耳壺で、底部にはへらで「祖母懐」と刻まれている。素地は灰色の祖母懐土で薄手に挽き上げられ、釉層は薄く、黒褐色の古瀬戸釉がハケで塗られているが、釉むらが著しい。一般に祖母懐茶壺と呼ばれているもので、呂宋壺の影響をうけて作られたものである。(18)は、良質の仕上がりで茶入れと考えられる。茶入れには、口が広く立ち上りの短かい頸部をもつものも出土している。水注(21・22)は注口部と耳部をもつものであるが、(22)は注口部に鉄片がつめられている。他に、岐阜県小名田窯下1号窯出土と同形式の鉄軸花瓶も1点出土した。

黄天目釉では、碗が3個体分出土した。(5)は直径12cm、高さ6.2cmで、器形は全く鉄軸の天目茶碗と同じである。(23)は口縁部がくびれず外上方にそのままのびきった碗で、胴下部には鬼板が塗られている。ともに軸はかせているが、褐色に緑黄色をおびた色調を呈している。

瓦質・土師質土器 (PL. 8 第7図)

土師質の皿は、85,785gの出土量であった。(24)は直径9.2cm、高さ2.1cmのもので、底部中央には直径0.4cmの穴が穿たれ口縁にも挟りが1個所みられる。灯心油痕が付いていることから、灯明皿の心押えに使用されたものと考えられる。従来の心押えは、土師質皿を直径1.5cm程度の円形に成形しなおしてその中央に穴を穿ったものであった。他に土鉢3点(25)、土釜、土鈴などが出土した。

瓦質のものでは、香炉、火鉢などが若干個体出土した。(26)は直径7.8cm、高さ5.1cmの3脚の

ついた香炉で、表面は縦方向のナデ押えがみられ、周囲には8個の菊の印花を配している。

中国製陶磁器 (P.L. 8~10 第8・9図)

青磁は碗・皿が多く、他に鉢、花瓶、香炉などがある。碗(27)は剣先を波状に、弁間を線刻で無造作に表現した蓮弁文碗である。見込みには「富」字の周囲に蓮弁を配した印花文が押されている。浮彫蓮弁文碗や無文の碗も若干みられるが大半はこの形式の碗である。皿は稜花皿が多く(30)のように直径12cmで内面口縁下に波状文を描いたものや、(31)のように直径14cmで内面に唐草文、見込みに「富」字を印花したものがほとんどであった。皿のなかでとくに注目したいのは(28・29)で、淡い青磁釉が施されているため当初は灰釉皿と見違ったものである。これは直径11cmの胎土が非常に良質の皿で、作りも端正なものである。ロクロは逆時計方向で、見込みと外面下部は露胎のままである。皿では他に木瓜形小皿(33)がS B 1559の建物から一括して多く出土しており、また(43・44)なども若干出土した。花瓶(35)は頸部に耳をもつもの、(39)はいわゆる青磁下薫瓶とよばれるもので、ともに宋代の作と考えられる。香炉(36)は、鎌倉円覚寺に伝わる袴腰香炉と全く同じもので宋~元代の優品である。

染付では碗、皿が多く、他に鉢、杯、壺などがある。碗(48)は直径11.7cm、高さ6cmの「宣徳年製」銘をもつもので、外面四方に牡丹と雲文を幾可学的に配している。(50)も同形の碗で「大明年造」銘をもち、鳳凰唐草文を配している。これはサイゴ寺出土のものと同接できた。(49・51・52・53)の碗も少数ではあるが出土している。皿(47・59)は見込みに羯磨文を描いた小皿で、他にも見込みに玉取獅子文を描いたもの(54)、唐草文を描いたもの(57)、外面は簡略化された渦文風の唐草文を連続して、内面見込みに梵字を四方に配したもの(55・56)、蕃筋底で、外面下部に芭蕉文風の文様を放射状に配したもの(58)なども比較的まとまって出土した。(45・46)は口径9.5cmの染付の壺とその蓋であるが、文様も簡略化されており、類例もあまりみられないものである。

白磁は皿と杯が出土した。皿(63)は口径11.9cmのもので出土例は一番多い。(64)は口径15cmの大形の稜花皿で、胴下部は菊形を呈している。この皿はS B 1559の建物から一括出土している。(65)は胎土、釉、成形ともに良好な白磁の輪花鉢の破片である。弁間、内面は凸線で、外面は凹線でその稜を表現している。また外面の4個所に、一般に馬蝗絆とよばれている鉄の鏝による接合の穴が穿たれていることから、貴重品として割れてからも伝世された鉢であることがわかり、定窯の製品である可能性が高いものである。

鉄釉としては、禾目の碗が2点出土した。(67)は立ち上りが深く、口縁のひねり返しも弱い。口縁には覆輪の付いていた痕跡が残っている。釉はたっぷりとかけられており、胎土は灰白色の磁質に近い。高台はわずかに凹面を呈し、へらでおこしている。ロクロの回転は逆時計方向である。他の1点は破片であるが、胎土は黒色の荒い粒子のもので、禾目もしっかりしており建窯の製品と考えられる。これもサイゴ寺のものと同接できた。

鉄軸茶入れは2点出土した。ともに肩衝茶入れで、(68)はサイゴ寺のものと接合できた。緑釉皿は菊花形の小皿で3片出土した。緑釉と青釉の2色あり、いわゆる紅皿とよばれているものである。中国で製作されたものと考えられる。

その他の陶磁器 (P.L. 11 第9図)

朝鮮製のものとしては、舟徳利、蕎麦茶碗、水注などがある。舟徳利(70~73)は泥緑釉が全面にかけられた底の広い瓶で、タタキ成形のため器壁は3~4mmと非常に薄く仕上げられている。比較的多く出土するものである。蕎麦茶碗(74・75)は胴下部がいったん丸みをもってから外上方へそのまま直線的にのびる形式のもので、色調は淡い灰青色を呈している。(74)の畳付と見込みには10個の、(75)の見込みには5個の目跡がそれぞれ見られる。水注(76)は胴径8cmの三島手のもので、サイゴ寺出土のものと接合できた。

日本各地で製作されたものとしては、まず信楽焼壺(83・84)がある。破片数は少ないが、信楽焼特有の硅石の吹き出しがみられ茶褐色に固く焼きしまっている。(78・81・82・116)は須恵質のもので産地は不明である。しかし(116)はその器形が灰釉の香炉と全く同じであることから、瀬戸・美濃地方でこれらの須恵質のものが焼かれた可能性が強いものと思われる。

なお、産地不明の陶磁器は、今回の調査で比較的多く出土していることを付記しておく。

金属製品 (P.L. 12 第10図)

化粧道具として毛抜が2本出土した。(92)は長さ8.4cmの小形のものである。武器には切羽・鉄鎌・小柄4本・鉄砲玉1個などがある。切羽(93)は長さ4.3cm、幅2.4cmのもので、周囲に刻み文様を施している。また表面と側面に黒漆が付着している。鉄鎌は鍛造で、長さに2~4.8cmと不揃いがめだつ。(94・96)は尖根、(95・97)はのみ根形式である。日常生活用具としては金箸・鉄鍋・提子・五徳の脚などがある。金箸(101)は上部に木製の柄をとりつけるための黒漆が付着しており、(103・104)は長さ18.1cmで上部に笹の葉状の刻みを施している。ともに火箸として使用されたものと思われる。農具としては鋤先(106)・鉄釘・鎌(99)・猿鬚(100)・手斧・先端が2股になった熊手状の金具などがある。手斧(105)は長さ17cm、幅3cmで、柄上部に鉄の楔が付けられている。柄部はないが、片手で作業できる重さから、石工人の石材を削る工具と思われる。他に紡錘車1個・銅銭などが出土した。銅銭は合計178枚あり、種類は北宋銭を中心として従来のものときほど変化はない。ただ後醍醐朝の「大和通宝」銭が1枚はじめて出土した。

木製品 (P.L. 13 第11図)

将棋の駒は2枚出土した。(108)は「飛車・龍王」で、(109)は「□□・金」である。朝倉館外濠出土の駒は、厚さ0.2cmのへぎ板を利用したものであったが、これは先端厚が0.2cm、尻部厚が0.9cmと差がみられ、駒の体裁を整えたものである。木櫛は横櫛形式で4点出土した。2点は挽櫛、2点は梳櫛である。(111)は幅8.7cm、高さ4.2cm、歯数72本の挽櫛で、(110)は

幅 7.4cm、高さ 4cm、歯数16本の梳櫛である。挽櫛のもので、歯のつけ根の引き通し線が直線になるものも1点みられた。下駄は9点出土した。内訳は連歯下駄4、差し歯（露卯）下駄1、一ツ目下駄3、床土上から出土した木履下駄1である。(112)は表面が焼けこげているが台部の長さ16cm、幅9.2cm、厚さ1.1cmの連歯下駄で、(114)は楕円形の差し歯下駄で長さ20.5cm、幅8.3cm、厚さ2.8cmの台に納穴2個づつで歯がとりついている。(115)は長さ21cm、幅 8.4cm、厚さ 2.2cmの一ツ目下駄で、鼻緒穴は前壺1個だけである。足指のあたり痕や、裏面のとくに前・後に磨耗が著しい。木履下駄は後世のものかもしれない、赤いベンガラなどが台裏に付着している。木製品としては、他に**傘のロクロ・木箸・漆塗り箸・漆塗り椀**・切断されて再利用されたと思われる**鴨居・石積施設 S F 1617**から出土した長さ30.2cm、幅22cm、厚さ 1.9cmの板の上部隅を少し切り落し、下半分は便所床下に埋込むため、両側面を幅4cmづつ切り込んだ**金隠**と考えられるものなどが出土している。

石製品 (P.L. 11)

バンドコ (P.L. 1) は、平面が楕円形を呈し長径24.8cm、短径17.8cm、高さ13.5cmで、長方形の窓が8個穿たれている。中から灰釉皿(3)、青磁皿(28・29)、白磁皿(63)、染付碗(48)の5点の完形陶磁器が発見された。バンドコを食器の収納に利用したものと思われる。**磁石**(91)は長さ13.8cm、幅 3.4cmの仕上げ磁で、他には砂岩質の荒砥用や、中砥用のものも出土している。**硯**(90)は隅丸形式のものであるが、他はすべて長方形の石製硯である。**石鉢**も多く出土したが、長方形、円形、楕円形のがみられ、脚も3～4本つものや平底のものがある。S B 1556建物の西方からは、とくに**一石五輪塔・五輪塔板碑・石仏・石籠**など仏教に関係した石造遺物の出土がめだつた。年号は天文・弘治・永祿年間で、名号は「南無妙法蓮華経」である。北隣の「サイゴ寺」も同様であり、日蓮宗系の寺院が近くにあったと考えられる。S B 1556建物も、寺院としてとらえることができるかもしれない。他に**挽臼・茶臼・炉壇**なども出土した。

その他の遺物 (P.L. 11 第10図)

墨(85)はS B 1558建物の焼土面から出土した。幅1.7cm、厚さ0.9cmで下部は欠損している。表面には「蛟龍」文様、裏面には「李家烟」の3文字が型押しされている。古事類苑によれば「二諦坊墨」と称されるもので、油烟を材料にして南都(奈良市)興福寺で作られたものである。なお、同じ焼土面から「旨・自・入・啓」などの文字が書かれた**炭化紙片**も出土しており、これは書状と考えられた。**ガラス製小皿**(86)は直径8cm、高さ 1.9cmで、淡い紫色を呈している。**数珠玉**(87・88)の1点は水晶製、1点は藤色のガラス製のものである。他には**炭化靱・スサ入壁土・量表**などが出土した。

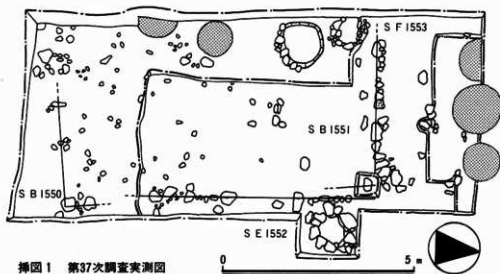
その他の調査

第37次調査

第37次調査は、福井市城戸ノ内町庄角14—57、58石川成志氏の作小屋の移築に伴う現状変更地の事前調査で、調査面積は約100㎡である。昭和55年3月24日から31日まで7日間調査を実施した。当調査区は第27次調査で隣接する南側の宅地を調査しており、南北方向に走る土塁や井戸・溝・石積施設等が検出された。今回の調査では礎石建物S B 1550、S B 1551、井戸S E 1552、石積施設S F 1553、ピット状遺構、砂利敷面等が検出された。礎石建物S B 1550とS B 1551とは層位を異にしており、S B 1551が一時期古く、井戸S E 1552はこの礎石建物に伴うものであろう。井戸S E 1552のすぐ脇に間口1間の入口がみられる。この付近で炭・焼土の集中がみられた。石積施設S F 1553は南壁部分が破壊されている。礎石建物S B 1550の時期に伴うものであろう。礎石建物S B 1550、1551は方位に若干のズレがみられるがほぼ南北（東西）方向に軸を持つと考えられ、第27次調査で検出された土塁S A 954の方向と一致している。今回の調査区は現水田面であり、更に東側に遺構が広がって遺存しているものと推定される。遺物の出土は若干の陶器片を除いて殆んどみられなかった。調査区の西側と北側に近代以降の所産とみられる桶が計5個、埋置されていた(アミ部分)。桶中には近代陶器片、ガラス瓶、金属製品等が大量に遺棄された状態で出土した。

第38次調査

第38次調査は、福井市城戸ノ内町庄角14—26・1梅田豊一氏の増築に伴う現状変更地の事前調査で、調査面積は約100㎡である。第37次調査と併行して、ほぼ3日間調査を実施した。既に宅地として使用されており、土層の攪乱が行なわれていた。遺構は検出されなかった。



環境整備

昭和55年度は、51年度に発掘調査した出雲谷地係の屋敷跡2260㎡、54年度に調査した赤洲地係の屋敷跡 425㎡と下城戸地係の屋敷跡および外濠跡の2200㎡を、芝張りや砂利敷、ソイルセメント舗装、高木植栽などで整備した。また館跡前の仮駐車場の周囲に 700㎡のソイルセメント舗装による広場を造成するとともに、出雲谷整備地と一乗谷川の間にも園路を設けた。工事は請負で、55年9月1日～11月29日にかけて行われた。

下城戸屋敷跡、外濠跡整備工

下城戸の南側、城戸の土塁の内側にあたる地区を、発掘調査したところ、「城戸ノ内」の中心部にもみられたような小規模な屋敷跡や埋襲施設、石積施設、井戸、石組溝、道路跡などが検出された。しかし遺構の残存状況が必ずしもよくなかったため、埋めもとして整備することにした。山砂を盛土整地の上、高麗芝を1140㎡ほど植栽した。

発掘地区の南端に検出した幅約 5.5mの幹線道路跡は、砂利をしきならして表示した。なお道路北側の側溝跡は、側石のなくなっている部分は補充、修復した。

下城戸の外側に、三本の発掘トレンチを入れて、幅約10mの外濠跡を確認したが、調査の都合上濠底まで発掘できなかったため、表土50cm深さほどを排除して滞水させ、外濠跡を表現するようにした。濠跡に導水するため、また現在下城戸土塁木戸口を通っている農業用水路は、将来見学者を木戸口から導入する場合邪魔になるので付け替える必要があり、その水路の役目も兼ねて、県道沿いに新たに水路を設けた。

新設水路の延長は101m、幅員は底で1.2mである。10cm厚の砕石基礎の上にワイヤーメッシュをおき、10cm厚でコンクリートを打って溝底とした。溝側の高さは50cmにし、野面石の練り積みとした。泥溜槽は、水路の曲り角に一個所設置した。樹は内法の大きさ100×100cm、深さ60cm、底部厚10cm、側壁厚15cm、ワイヤーメッシュ入りのコンクリート製で、10cm厚の砕石基礎の上に据えた。また事故防止のため、上面をグレーチングで覆った。

土塁の東裾に小さな石仏の覆屋があるが、お参りの都合上その前の水路上には、4m幅で厚さ3cmの杉の板橋をかけた。またホテル飼育場の前には、径10cm前後のヒノキ丸太材による幅1.8mの橋を設けた。

濠跡に貯水するため、東側に内径5cmのビニール管を埋設、水路から導水するようにした。

濠の汀には、下方にカキツバタ、上方にハナショウブを寄植した。また新設水路の上流の東側40mにわたって、事故防止と景観保全をかねて高さ1.2mのサザンカを1本/㎡の割合で列植した。下流の水路の北側30mにわたっては、アジサイ、サツキ、ツツジを各々1本/㎡の割合で列植した。

水路の北には、広さ 380㎡ほどの砂利敷の広場を造成した。広場の要所には、日陰と観賞をかねてサクラ2本、シダレヤナギ2本、ケヤキ1本の高木を植栽するとともに、長さ2.95m、

幅38cmのベンチを3基設置した。ベンチの座部は、12cm角のヒノキ材3本を笥谷切石の脚の上のせたものである。また公有地と北側の民地との間には、内幅20cm、長さ1mのベンチフレームを37mにわたって伏設し、史跡内に降った雨水が隣家に流入しないよう配慮した。

出雲谷屋敷跡整備工

出雲谷地区も、遺構の遺存状態が悪く、屋敷の規模は不明であった。建物跡が三棟ほど検出されたが、その中の最も規模の大きい掘立柱建物跡を整備することにした。遺構保存上一旦埋め戻し、柱穴の真上に対処に耐える低木のイヌツゲ16本を植栽、建物の規模が分かるようにした。

発掘地の中央部には、盛土整地した広さ650㎡の高麗芝による芝生広場を造成した。また発掘地周辺の遺構のない所には、観賞と史跡の景観撫育のため高木と低木を植栽した。植栽樹木は、ヤマザクラ30本、アカマツ5本、ケヤキ5本、シダレヤナギ5本、ヤマモミジ5本、ウメモドキ14本である。

赤濁地係屋敷跡整備工

51年度に保存整備したサイゴ寺跡と新設県道予定地の間に発掘された、小規模な屋敷跡6区画を整備した。大部分うめもどしたが、屋敷の区画ごとに舗装、植栽材料をかえて、各々の規模と配列が歴然とするよう工夫した。採用した手法は、ソイルセメント基礎細砂利敷、礫混りソイルセメント舗装、高麗芝張りの3種である。

石組溝は補修し、排水に利用することにし、井戸跡は主にうめもどした上、天端の割石のみ復原表示した。

なお屋敷群の東側に発掘された道路跡には、砂利を補充、敷きならした。

館跡前ソイルセメント舗装工

これまで整備した芝生広場と仮駐車場の間が、L字形に雑草が繁茂した状態で残っていたので、景観と利用上から整備することにした。この地区は馬場跡に推定されているので、土の広場の雰囲気醸成するためソイルセメント舗装を採用した。また仮駐車場も将来ソイルセメントで舗装することが望ましい。

山砂0.3㎡あたりセメント1袋(40kg)の割合で混合、ローラーでてん圧した。攪拌混合には、実験的に耕運機を使用した。山砂の上にセメントを一面に敷きならしたのち、耕運した。

園路造成工

将来、出雲谷地区に渡る遊歩道橋を一乗谷川に架設する計画があるが、その地点と本年度の整備地を結ぶ園路を前もって造成することにした。

園路の総延長は50m、幅員は1.5mである。発掘の際生じた礫土を盛土でん圧した上に、10cm厚のソイルセメント舗装を行った。道の両側には、土留用に15cm内外の玉石境塙工を行った。

出雲谷整備地の手前は、かなりの斜面になっているので、踏面1.5m内外、段石に玉石を用いたゆるい階段を構築した。

花粉分析調査

はじめに

史跡の環境整備は、往時史跡はどのような自然環境であったかを追究し、可能なかぎりその環境を復元するような方向で行うことが望ましい。ことに当時の植生を考察することは、史跡の修景にあたって欠かせないものである。考察の資料としては、発掘などで出土する樹幹、枝葉、茎、種子などの大形の植物遺体、化石と花粉や胞子化石の微化石がある。

植物集団は、気温や雨量、土壌や地形、人為的影響などの差異によって異なった植生を生じ、特定の環境と結びついて、優占種によって特徴づけられた一定の相観と構造をもつ。また群落を構成する種類はおのずから限定されており、植物遺体の中に、ある群落に限って出現する標徴種や環境の指標となる指標植物が見出されれば、その群落の他の構成種をある程度推定することができる。

大形の植物遺体には、出土地点近くに生育していたと考えてよいものが多いが、微化石の中には、風媒花粉のように遠距離から風に乗って飛来堆積したものが多数含まれる。また流水によって運ばれ、濠などに沈澱堆積した花粉もある。このように花粉は、かなり広範囲にわたって移動することを念頭におかなければならない。

朝倉氏時代に館の外濠に堆積した花粉は、どの位の範囲の母植物からもたらされたものか、また周辺の植生はどのような内容であったかを知る手がかりを得るため、今回は朝倉氏館跡周辺の植生調査と空中花粉ならびに土中の花粉分析をあわせて行い、植生と花粉の堆積との相関関係について考察した。また流水によって花粉はどの程度運搬されるものか調査を試みた。

花粉分析はバリノ・サーヴェイ株式会社、植生調査は名城大学農学部野口研究室に依頼して行い、まとめと考察は藤原が担当した。ご協力いただいた両研究室には、心から感謝申し上げる次第である。

調査概要

1. 調査地点

足羽川の一支流である一乗谷川に沿って、谷底平野をもった小さな壮年谷があり、遺跡は主としてこの氾濫原から山麓部にかけて遺存している。館跡は右岸部の山麓部にあり、東側は傾斜度30°ほどの山地になっている。調査地点は館跡の周辺に、それぞれ立地や植生の異なる所を選んで設定した。

No.1 小高い丘の「観音山」頂上にあり、アカマツやコナラなどの雑木に覆われている。

No.2 「観音山」の中腹にあり、同じく雑木に覆われている。

No.3 小さく谷状になったところで、附近に樹木はすくない。近くに圍路があり、ツゲが列植されている。

No.4 中の御殿跡下の斜面にある。この斜面は昭和49年秋期の中の御殿跡発掘調査の際、排土がすてられたところで、樹木の大部分と草本類はその後、排土に生育したものである。

No.5 館の外濠に続く空濠に位置し、上方はケヤキやカシの広葉樹の枝葉で覆われている。

No.6 義景墓所の中にあり、スギやイチョウの高木でうす暗く鬱閉された状態にある。

No.7 昭和43、44年に発掘した館跡庭園の大きな滝副石の後になる。周辺には植栽したサツキ、ツツジ、ハギなどの低木が多い。

No.8 同じく44年に発掘した館跡東側斜面の裾の、斜面が平坦部になるところに位置する。斜面にはタニウツギやネムノキなど、発掘後実生ではえた低木が多い。平坦部は砂利で舗装されている。

No.9 昭和48年に発掘した館北側外濠跡の東側に設けた。濠跡の未発掘部分であり、3 m50 cm強の厚い堆積土の上に湿地性草本が繁茂している。南側には高さ3 mほどの土塁があり、斜面には芝生、上面にはサツキが植栽されている。

No.10 昭和46年度の館跡上方の整備の際、造成された小さな貯水池の東北隅にあたる。浅い谷状の地形に、堰堤を築いてできたものである。周辺に樹木はすくなく、池にはガマの群落がみられる。

No.11 発掘した館の圍池の池底には、平たい大きな川石が敷きつめられていたが、西側に部分的に敷石がないところがあったので、その場所を選んだ。この圍池には、上部の導水路から土砂が流れこむが、時々泥さらえをするので、池の内部にはまったく植物の生育がみられない。

No.12 館の外濠跡に鉄の矢板をうって発掘調査したが、調査終了後水を貯えて保存整備することになった。花粉採取容器は、館の排水路に続く暗渠出口から3 mほど離れた矢板の際に設置した。

2. 調査地周辺の植生

一乗谷川東側の山地の大半は、スギの植林地からなる。そのほか部分的に、クレーミズナラ林、イヌシデ林、クレーコナラ林、ヒノキ植林、アカマツ林、ウラジロガシ林、モウソウチク林、マダケ林などが介在する。西側の山地のほとんどは、山麓部のスギ、尾根筋のヒノキ、アカマツなどの植林地によってしめられる。

平地部の大部分は、昭和46年頃まで水田になっていたが、現在は公有化され、ススキーニオイスマレ群落、ヒメムカシヨモギーエノコログサ群落、チガヤ群落、チゴザサーセリ群落、ヒメジョオン群落、ヒメムカシヨモギーアキメヒシバ群落、ダンドボロギク群落、ススキーコブナグサ群落、ススキーヨモギ群落、ススキードクダミ群落、ススキーワラビ群落で代表される草地や芝地になっている。

3. 調査期間

昭和54年3月14日に、調査地点No.2、3、4、5、6、8に、同3月15日にNo.1、7、9に花粉採取容器を設置した。同3月16日に調査地点No.10、11、12の水中に容器を据えた。3月14日の容器据付開始時点で、すでにジンチョウゲ、ツバキ、ウメなどの花は咲いていた。

容器は同年12月14日に、すべてとりあげた。土中花粉分析用の土壌は、12月17日に採取した。植生調査は、昭和54年5月10日から55年12月11日にかけて行った。別表の植物相一覧のうち草本については、昭和55年7月28日～31日にかけて調査され確認されたものが大部分である。この時期は花粉採取年の翌年であり、1年生草本に関しては、前年になかったものが含まれていたり、あったものがなくなっている場合もありうる。

4. 調査方法

(1) 花粉採取方法

空中花粉の採取は、挿図2のように10×15cmの円筒のガラス容器をベニヤ板の上に据付け、容器上端から1cm 3mm上のところに、同じくベニヤ板(45×45cm)を4本のボルトで固定し、覆とした。覆のベニヤ板の中央には径5cmの穴をあけて、花粉が容器の中に落下しやすいようにした。しかし長雨や豪雨の時は降下した雨水が容器上縁に達し、わずかずつ



挿図2 花粉採取容器

あるが溢流することがあった。雨の日には飛散する花粉はすくないと思われるが、軽い浮遊性のある花粉は多少流出したことも考えられる。

土中の花粉は、空中花粉採取容器設置地点から四方に、50cm位の所の表土を移植ゴテでほりとり、これら四個所の土を混ぜあわせ分析に供した。

貯水池、園池、濠の水中花粉は、前者二箇所は水深が20cmほどなので、容器の上端が水面下5cm位になるように、また濠の場合は水深が3mあまりあるので水面下50cm位になるように据えて採取した。

(2) 植生調査

樹木は花粉採取容器設置地点を中心とする半径10mの範囲のすべてのものについて、種類や葉張り、樹高などを調査した。

草本類、つる植物については、容器設置地点を中心にして3m角の範囲の植物相を調べるとともに、優占種のいくつかについてはその範囲における被度を測定した。

また開花状況を月1回の割合で観察するとともに、成熟の度も調査した。

5. 調査結果と考察

土中、空中、水中の花粉分析結果の比較、検討を行う。

No1 マツの花粉が、No7の試料を除いて、きわだって多い。調査地内のアカマツの巨樹2本、被度34%の影響が考えられる。コナラの被度54%は、全調査地区の中で最大で、空中花粉における出現率も最多である。ウルシ属の花粉が、他試料に比較して、土中、空中ともに多く検出されている。調査地点から2mのところには存在するヤマウルシによるとと思われる。土中における樹木花粉の割合が93.4%で、この地区が樹木に富んでいることを示す。

No2 クリの被度65%で、全調査地区で最大であるが、土中、空中ともに最多の花粉出現率を示す。ウワミズザクラは成木であり、かなりの被度40%をしめるが、バラ科の花粉が検出されなかったのは意外である。土中の広葉樹花粉は33.6%と他に比して圧倒的に多く、現地植生をよく反えしている。

No3 土中に単条溝型胞子が20.6%と他に比べてかなり多く検出され、シダ類が良好に繁茂していたことを示す。調査地に生育している樹木はすくないが、土中の樹木花粉出現率も67.5%とすくない。調査地区に現存しないスギ花粉が、空中花粉で多く検出されたのは、東側20m位からはじまる山上の植林されたスギ林の影響をうけていると考えられる。

No4 土中における草本花粉が30%と最多で、この地区に草本がよく繁茂していることを示す。現在成熟した樹木はすくない、上部はかなり開放された状態で、空中花粉では樹木花粉が79.8%と割合多く検出されている。

ヨモギは調査地区の67%の被度をしめる優占種で、土中からも多数の花粉が採取された。しかしスギナは88%の被度をしめるにもかかわらず、土中から多数の胞子が検出されていない。

No5 ケヤキの巨木があり、62%の被度をしめる。この被度は全調査地区で最大で、土中の花粉も最多である。またシラカシの成木、被度46%があり、空中花粉においては著しく多量46%の出現をみた。しかし土中花粉においては他に比して最多といえ、出現率1.4%とかなり小さくなっている。土中では花粉が腐植分解し保存率が悪いことが予想される。

土中に71%のスギ花粉の出現率をみるが、絶対数からは、他地区とあまり差がない。

No6 スギの被度61%と全調査地区で最大で、土中における花粉の量も73.5%と最多である。絶対数においても、他地区の倍近く検出されておりその差は歴然としている。

モミジ、イチヨウの成木があり、被度も大きい割合には、土中、空中ともに顕著な花粉の出現がみられない。

No7 成熟した樹木は、サツキ、ツツジ、タニウツギ、ハギなどの低木であるが、被度も4%前後と小さく、土中、空中ともに花粉が検出されていない。成熟木がすくないのに、樹木花粉の割合が高いのは、この付近は常に除草などの管理がよくなされておき、草本類の繁茂がすくないことも一因と考えられる。

成熟木がないマツの花粉が土中に多量に検出されたのは、この地点は上方が開放されており、東側山上の松林から飛来する花粉が落下堆積しやすい位置にあることによると思われる。館跡周辺にはみられない、東側山上に生育するイヌシデ林のもとと推察されるクマシデ属の花粉が、他地点より多く空中から検出されたことは、この地点が遠方から風によって、風媒花粉が飛来落下しやすい場所になっていることを物語っている。空中花粉では多量のマツ花粉が検出されていないが、他地点における出現率も、1977年のマツの空中花粉出現率より、全体にかなり低い傾向にある。1979年においては、マツの花粉生産量がかなり低かったことが予想される。

No.8 成熟したタニウツギが多数みられる地区で、土中、空中ともに絶対数はすくないが検出された。とくに空中においては、他地区とかなりの差の出現率である。ヒカゲノカズラも多くみられ、土中花粉における出現率も他地区に比べて高い。

花粉採取容器近くに成熟したネムノキがありながら、予想に反して花粉は検出されなかった。

No.9 樹木のすくないところで、シダ類の花粉が多く検出された。またイネ科、カヤツリグサ科、タデ科の花粉が他の地区より多く出現し、調査地区の植生をよく表示している。

空中花粉から、ツツジ科の花粉が採取されたが、これは調査地区両端に列植されているサツキのものとして推定される。

No.10 貯水池の水中の花粉を分析したが、ガマ属の花粉が圧倒的割合66.8%で検出された。貯水池はほぼ全域がガマの群落で覆われている状況で、当然の結果といえる。調査地区とその周辺に、花粉生産量の大きい樹木もみあたらず、採取された花粉、胞子の絶対数もすくなく、その中にしめる樹木花粉の割合もきわめて小さい27.1%である。

No.11 マツの花粉が比較的多く検出されている。きわだって出現率の大きい花粉はないが、種類数においては全試料で最も多い。調査地区やその周辺にみられない樹木や草本の花粉も多く、この圃地は、遠方から種々の花粉が飛来、また流入しやすい立地条件にあるといえる。

No.12 No.11と同じように、格別他試料と差をもって出現する花粉はみあたらない。館跡周辺の花粉が流入したと思われる、平均的な構成になっている。1～9までの土中の樹木花粉出現率の平均は81.2%、草本花粉の平均は9.7%で、外濠の水中から採取された花粉の割合は、それぞれ83.1%、12.4%とかなり近い数値がでている。

おわりに

花粉分析で判明する科や属の数は、甚だすくないことが分った。実際は調査地点近辺に生育していても、土中に堆積し腐植せず後年採取されうる花粉は、きわめてすくないといえる。植生調査で確認された樹木の種類は、42属であるが、花粉が採取されたのは3科、36属で、うち22属は調査地区外の樹木の花粉である。花粉生産量の高い遠方の樹木の風媒花粉などがかなり混入することが分る。しかし土中から検出されるこれらの花粉の量はわずかで、その地区を特

徴づけるのはやはりその地に生育する優占樹木の花粉である。No1のアカマツ、2のグリ、5のケヤキ、6のスギなどである。

草本、シダ類では、117属の現存植物に対して、花粉が採取されたのはわずかに14科、12属で、うち2科、6属は調査地区以外の草本類の花粉である。草本類においても、ヨモギやガマにおいては、優占の度合が花粉の出現率にあきらかにあらわれている。

また今回の調査であきらかになったのは、同一場所での土中と空中からの花粉採取量を比較すると、9地区の広葉樹花粉出現率の平均値は、土中の方が空中の約2分の1であることである。広葉樹花粉は土中で保存、遺存率がわるいことが分る。古環境復原のための花粉分析には、堆積土を用いることが多いから、この事実は十分留意されなければならない。

次に調査地点が、樹木で覆われている樹林地か、あるいは草刈などの管理の手が施されていない雑草のしげるにまかせた草地かどうかは、樹木や草本類の花粉出現率の多寡で判明する。前者に分類できる調査地区は、No1、2、5、6、7、8で、土中における樹木花粉の割合の平均は88%であり、後者の地区はNo3、4、9で、その平均は68%とあきらかにすくない。

No10の貯水池の水の一部は、オーバーフローして、導水路からNo11の園池に流れこむようになっている。また園池の水は、館内の排水路を経てNo12の北側の外濠にそそいでいる。水中花粉の出現率をみると、貯水池の水中から採取された花粉が、園池の水中からも多く検出されているが、外濠の試料にはモミ属を除いてまったくみられない。園池の試料に検出されたものは、外濠の試料にも多くみられる。これらの花粉が、すべて水を通して流入したものとまでは考えられないが、No10と11、No11と12の結びつきが強いのは明白である。

貯水池で多量に検出されたガマの花粉は、外濠の水中からは採取されていない。大部分が外濠まで流れていないようである。外濠跡の土中から検出されていないヒカゲノカズラ科とセンマイ科の花粉が、外濠の水中から採取されたことは、館の中の花粉がかなり外濠に流れこむことを物語っている。館の中の植物相を考察するには、外濠の沈泥堆積土はかなり有効であることが予想される。

註 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡環境整備事業報告書Ⅰ 1978福井県教育委員会

「朝倉氏遺跡の花粉分析」広島大学総合科学部 安田喜憲

第2表 調査地植物一覧

属名	種和名	調査地番号	属名	種和名	調査地番号
Ginkgo	イチヨウ	6	Camellia	ヤブツバキ	1, 2, 3, 5, 6, 7
Cephalotaxus	イヌガヤ	3, 7		サザンカ	7
Pinus	アカマツ	1, 7	Eurya	ヒサカキ	1
Cryptomeria	スギ	2, 4, 6	Daphne	ジンチョウゲ	4
Juglans	オニグルミ	5	Acanthopanax	コシアブラ	1
Castanea	クリ	1, 2, 3	Aralia	タラノキ	4
Lepidobalanus	コナラ	1	Cornus	ミズキ	3
	ナラガシワ	2, 5	Aucuba	アオキ	1
Cyclobalanopsis	シラカシ	5	Clethra	リョウブ	1
Zelkova	ケヤキ	5, 7	Rhododendron	サツキツツジ	4, 7, 9
Morus	ヤマブク	3, 4, 6		モチツツジ	4, 6, 7
Magnolia	ホオノキ	1, 2	Styrax	エゴノキ	1, 2, 5, 6
Meratia	トウロウバイ	1	Callicarpa	ヤブムラサキ	2
Litsea	シロダモ	1, 2, 3	Clerodendron	クサギ	4, 7
Benzoin	クロモジ	2	Serissa	ハクチョウゲ	4
Hydrangea	アジサイ	5, 6, 9	Viburnum	ガマズミ	1
	コアジサイ	1		サンゴジュ	6
Kerria	ヤマブキ	4, 5	Weigela	タニウツギ	4, 7, 8
Prunus	ヤマザクラ	2, 3, 4, 6	Lycopodium	ヒカゲノカズラ	8
	ウワミズザクラ	1, 2, 6	Selaginella	クラマゴケ	3, 4, 6, 9
Albizia	ネムノキ	3, 4, 7	Equisetum	スギナ	3, 9
Lespedeza	ハギ	4, 5, 6, 7	Osmunda	ゼンマイ	1, 2, 3, 7, 8
Xanthoxylum	サンショウ	6	Microlepia	フモトシダ	5
Mallotus	アカメガシワ	2	Pteridium	ワラビ	1, 2
Buxus	ツゲ	3	Coniogramme	イワガネソウ	5
Rhus	ヤマウルシ	1, 2	Dryopteris	ヒメワラビ	3, 4, 5
	ヌルデ	6		ミゾシダ	2, 3, 4, 8
Ilex	クロガネモチ	4	Athyrium	シケシダ	3, 9
	ソヨゴ	1		イヌワラビ	2, 3, 5, 6
	ウメモドキ	6		ホソバイヌワラビ	3
Acer	イロハカエデ	1, 2		ヤマイヌワラビ	3, 5
	ヤマモミジ	2, 5, 6	Blechnum	シシガシラ	1, 2, 8
	コハウチワカエデ	1	Polypodium	ノキシノブ	6
	ウリカエデ	1, 2	Houttuynia	ドクダミ	3, 4, 5, 6, 7, 8, 9
Aesculus	トチノキ	2	Boehmeria	ヤブマオ	3, 4
Meliosma	アワブキ	2		メヤブマオ	6

属名	種和名	調査地番号	属名	種和名	調査地番号
	アカソ	3, 4	Kummerowia	ヤハズソウ	4
Rumex	ギシギシ	3	Pueraria	クズ	3, 8
Polygonum	オオイヌタデ	4, 8	Oxalis	カタバミ	3, 4, 7, 8, 9
	イヌタデ	3, 4, 5, 6	Mercurialis	ヤマアイ	3, 5
	ボントクタデ	1	Cayratia	ヤブガラシ	2
	サクラタデ	9	Ampelopsis	ノブドウ	9
	ミゾソバ	5, 9	Hypericum	オトギリソウ	6, 8
	ママコノシリヌグイ	3, 4, 5, 6, 9		ヒメオトギリ	7
	ミズヒキ	5, 9		サワオトギリ	8
	イタドリ	4, 6	Viola	ツボスミレ	3, 4, 6, 7, 8, 9
Achyranthes	イノコズチ	4, 5, 6, 8		タチツボスミレ	7, 8
Stellaria	ミドリハコベ	5, 6		オオタチツボスミレ	3, 4, 6, 8
	ノミノフスマ	3, 6, 7, 9		アオイスミレ	5
Cerastium	ミミナグサ	3, 4, 7, 9		スミレサイシン	2, 3
Sagina	ツメクサ	6, 7, 9		マルバスイレ	3, 7
Anemone	ニリンソウ	3		アリアケスミレ	8
Ranunculus	ウマノアシガタ	3		スミレ	8
	キツネノボタン	6, 7		ノジスミレ	7, 8
Akebia	ミツバアケビ	1, 2, 5, 9	Aralia	ウド	3
Epimedium	トキワイカリソウ	2	Hydrocotyle	チドメグサ	3, 6, 7, 9
Menispermum	コウモリカズラ	3, 6	Osmorhiza	ヤブニンジン	6
Corydalis	ムラサキケマン	3, 6	Cryptotaenia	ミツバ	3
	ミヤマキケマン	5	Chamaele	セントウソウ	3, 6
Rorippa	イヌガラシ	9	Oenanthe	セリ	3, 9
Cardamine	タネツケバナ	9	Lysimachia	オカトラノオ	8
	ヤマタネツケバナ	7		コナスビ	4, 7, 8, 9
Draba	イヌナズナ	4	Trigonotis	キュウリグサ	6
Astilbe	チダケサシ	3		ミズタバコ	5
Rubus	モミジイチゴ	5	Ajuga	キランソウ	4, 6, 9
	バライチゴ	5	Glechoma	カキドオシ	3
	フユイチゴ	2	Prunella	ウツボグサ	3
	ミヤマフユイチゴ	2	Clinopodium	ヤマトウバナ	3, 4, 5, 6, 7, 8, 9
Potentilla	キジムシロ	2, 3	Mosla	イヌコウジュ	9
	オヘビイチゴ	3, 4, 5, 6, 9	Mimulus	ミゾホオズキ	7
Duchesnea	ヘビイチゴ	4, 5, 9	Mazus	ムラサキサギゴケ	3, 4, 5
	ヤブヘビイチゴ	5		トキワハゼ	9
Agrimonia	キンミズヒキ	4, 9	Veronica	タチイヌノフグリ	5, 9
Desmodium	ヌスビトハギ	6	Justicia	キツネノマゴ	4, 5, 7, 8, 9

属名	種和名	調種地番号	属名	種和名	調査地番号
Phryma	ハエドクソウ	3	Sasa	チマキザサ	1, 2, 3
Plantago	オオバコ	4, 5, 6, 7	Agropyron	カモシグサ	4
Paederia	ヘクソカズラ	5, 9	Brachypodium	ヤマカモシグサ	9
Damnacanthus	アリドオシ	1, 2	Poa	スズメノカタヒラ	2, 4, 6
Galium	ヒメヨツバムグラ	3, 9		オオイチゴツナギ	4, 6, 7
Patrinia	オトコエシ	2, 4, 8	Eragrostis	カゼクサ	4
Valeriana	ツルカノコソウ	4, 5, 6	Agrostis	ヤマヌカホ	2, 3, 8
Actinostemma	ゴキズル	6	Alopecurus	スズメノテッポウ	4
Codonopsis	ツルニンジン	8	Phalaris	クサヨシ	3
Eupatorium	ヒヨドリバナ	5	Setaria	アキノエノコログサ	4
	サワヒヨドリ	8	Digitaria	メヒシバ	4
Solidago	アキノキリンソウ	8	Oplismenus	チジミザサ	2, 3, 5, 6, 7
Aster	ユウガギク	9	Paspalum	スズメノヒエ	9
	ゴマナ	8	Zoysia	ノシバ	7, 9
	ノコンギク	5, 8, 9	Arthraxon	コブナグサ	3, 4, 5, 6, 7, 9
Erigeron	ハルシオン	8	Miscanthus	ススキ	4, 7, 9
	ヒメジョオン	3, 4, 5, 6, 7, 8	Cyperus	ヒメクグ	7
	オオアレチノギク	5	Carex	アゼスゲ	4, 5, 6, 9
	アレチノギク	8		アズマナルコ	9
Gnaphalium	ハハコグサ	7, 9		ニシノホンモンジスゲ	2, 4, 5
	チチコグサ	7		ジュズスゲ	4, 5
Siegesbeckia	メナモミ	7, 8	Pinellia	カラスビシャク	5
Bidens	センダングサ	3, 6	Commelina	ツユクサ	1, 3, 5, 6
Artemisia	ヨモギ	3, 4, 5, 7, 8, 9	Juncus	イ	2, 5, 6
	オトコヨモギ	8	Luzula	スズメノヤリ	1, 2
Petasites	フキ	4, 5, 7, 8, 9	Heloniopsis	ショウジョウバカマ	1, 2, 3
Cirsium	ノアザミ	3, 8, 9	Hemerocallis	ノカンゾウ	4
Ainsliaea	キッコウハグマ	1, 2	Streptopus	タケシマラン	6
Lapsana	コオニタヒラコ	6, 8, 9	Polygonatum	ナルコユリ	1, 2
Picris	コウゾリナ	4, 8, 9	Disporum	チゴユリ	1, 2
Youngia	オニタヒラコ	4, 6, 8		ホウチャクソウ	6
Taraxacum	カンサイタンポポ	7	Ophiopogon	ジャノヒゲ	1
Lactuca	オオジシバリ	8	Smilax	サルトリイバラ	1, 2
	アゼトウナ	4		ヤマガシユウ	1, 2
Prenanthes	オオニガナ	2, 6, 7, 8		タチシオデ	3, 6
Crassocephalum	ベニバナボロギク	7	Dioscorea	ヤマノイモ	1, 2, 3
Typha	ガマ	9	Iris	シャガ	5

研 究 所 要 項

I 事業概要

1. 調査研究・整備事業
 - イ、朝倉氏遺跡発掘調査
第37・38・40次調査
 - ロ、環境整備
屋敷跡（下城戸、出雲谷、赤濁地係）、
下城戸外濠、館跡前整備、園路造成
 - ハ、古文書調査
2. 他機関への指導・協力
 - イ、調査・整備
 - 豊原寺跡（九岡町）7～10月 小野・南
 - 柚山城跡（南条町）6月 藤原
 - 小丸城跡（武生市）6月 藤原
 - 若狭国分寺跡（小浜市）6月 藤原
 - 薬師塚遺跡（三国町）10月 小野
 - 緑のデータバンク調査 藤原
 - 近世社寺調査 吉岡
 - 福井県窯業誌調査 水野
 - 福井県史調査 藤原・小野・吉岡・南
 - ロ、その他
 - 「よみがえる戦国一埋もれていた城と館」
4月～6月 名古屋博物館
 - 「福井県出土の中世陶器展」
6・7月 福井県陶芸館
 - 「日本の遊戯具」
1月（1981） 熱田神宮宝物館

3. 朝倉氏遺跡調査研究協議会
1980年11月28・29日 於 福井
「朝倉氏遺跡発掘整備第3・4次計画の
変更について」

4. 特別史跡内現状変更申請について
申請件数 11件
主な理由と面積

家屋の新・増・改築等	120㎡
菜園・森林伐採、その他	2437㎡
発掘・環境整備	8250㎡
計	10807㎡

II 予 算

発掘調査費	3,400万円
環境整備費	1,500万円
研究費	84万円
計	4,984万円

III 組織規定

福井県教育委員会行政組織規則 抜萃

（昭和46年6月1日
福井県教育委員会規則第5号）

改正 昭和46年12月23日教委規則第12号

昭和47年4月1日教委規則第3号

昭和47年10月24日教委規則第8号

第二節 出先機関（設置名称等）

第13条 出先機関として、支局、へき地、
複式教育事務所、特殊教育推進事務所
および文化財事務所を置く。

2. 出先機関の名称、位置および所管区域は、次表のとおりとする。

機関の 区分	名 称	位 置	所 管 区 域
文化財 事務所	福井県教育庁 朝倉氏遺跡調 査研究所	福井市	福井市（特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 の指定区域）

（出先機関の所掌事務）

第15条 各出先機関の所掌する事務は、
次表のとおりとする。

機関の 区 分	所 掌 事 務 所
	1. 史跡の発掘および発掘技法 の研究に関すること。 2. 史跡の環境整備および遺構 修景の研究に関すること。 3. 史跡の出土品の調査および 研究に関すること。 4. 中世史の研究に関すること。

附則（昭和47年4月1日教育委員会規則第3号）

この規程は昭和47年4月1日から施行する。

IV 職 員（昭和56年3月31日現在）

氏 名	官	職
森原武二	教育庁技術職員	所長 造園
水野和雄	教育庁技術職員	文化財調査員 考古
小野正敏	教育庁技術職員	文化財調査員 考古
岩田 隆	教育庁技術職員	文化財調査員 考古
吉岡泰夫	教育庁技術職員	文化財調査員 建築
南洋一郎	教育庁技術職員	文化財調査員 考古
伊藤正敏	教育庁技術職員	文化財調査員 歴史
吉越 強	事務補助員	
加藤吉則	調査補助員	

辞職・1980・10月 水藤真 国立歴史民俗資料館に転任



第40次調査遺構（東南から）



第40次調査（バンドコ・染付碗・青磁皿・白磁皿・灰釉皿）



発掘区全景 北東から



発掘区東半 南から



礎石建物 SB1562 東から



礎石建物 SB1560 東から



礎石遺物 SB1559 北から



礎石遺物 SB1556 東から



礎石建物 SB1555 南から



北西部小規模屋敷群 東から



道路 SS493



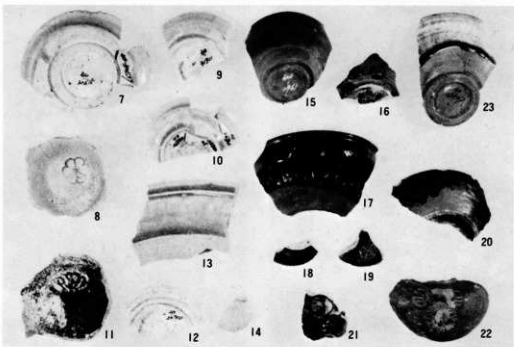
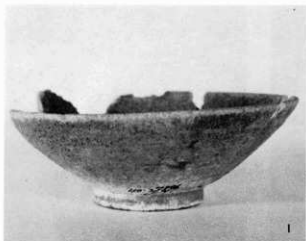
道路 SS1564



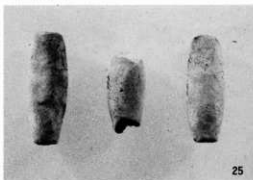
道路 SS1565



道路 SS1567



灰軸 1. 碗 2. 蓋 3. 皿 4. 香炉 黄天目釉 5. 碗 瀬戸・美濃焼破片 7~23



25



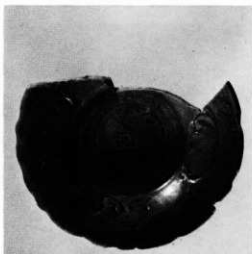
27



26



28

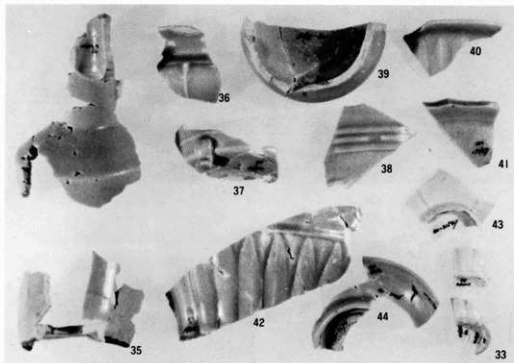


30

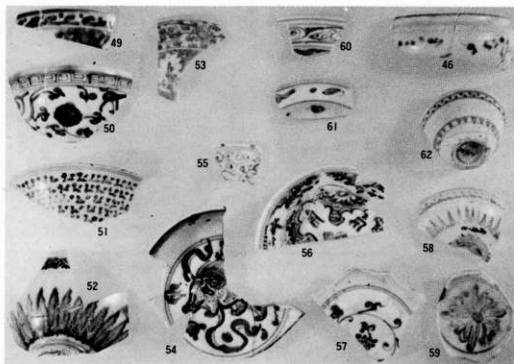


31

土師質 25. 土錘 瓦質 26. 香炉 青磁 27. 碗 28・30・31. 皿



中国製陶磁器破片 青磁 33・35~44. 花瓶・香炉・鉢・皿



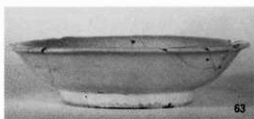
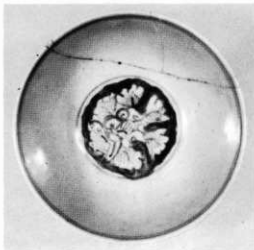
中国製陶磁器破片 染付 46・49~62. 碗・皿・鉢・杯・壺



45



47



63



64



48



65



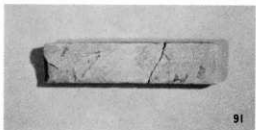
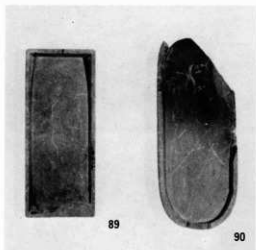
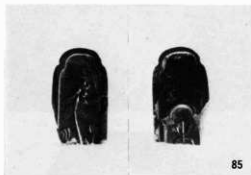
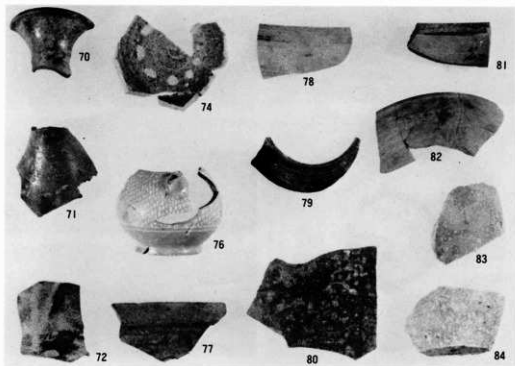
67



68

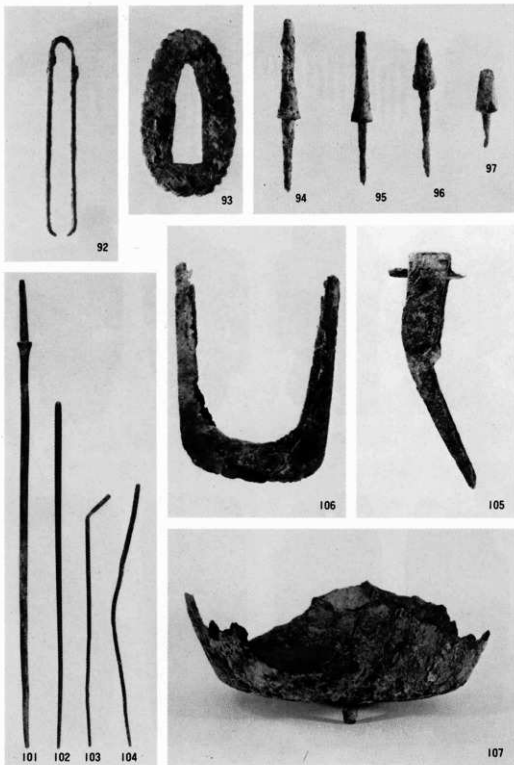
69

染付 45. 蓋 47. 皿 48. 碗 白磁 63・64. 皿 65. 鉢 鉄軸 67. 碗
鉄軸 68・69. 茶入

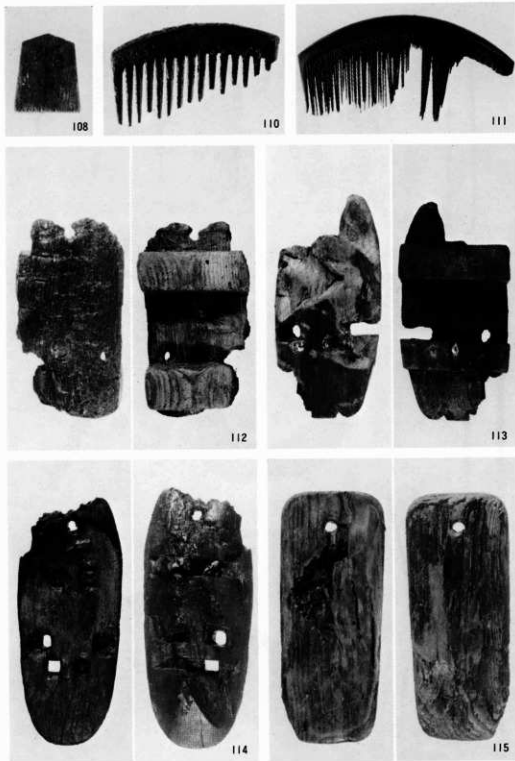


朝鮮・日本各地及び産地不明の陶磁器破片 70~84
87・88. 数珠玉 89・90. 硯 91. 砥石

85. 墨 86. ガラス皿



金屬製品 92.毛拔 93.切羽 94~97.鉄針 101~104.金箸 105.手斧 106.鍬先 107.鉄鍋



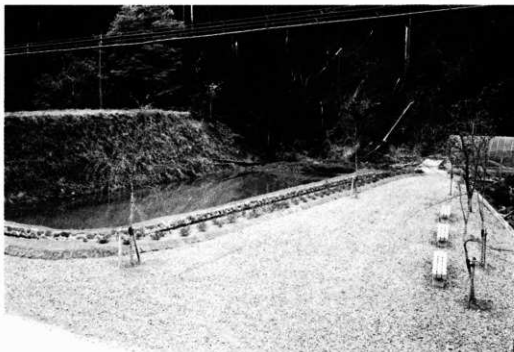
木製品 108. 将棋の駒 110・111. 木櫛 112~115. 下駄



第37次調査遺構全景 東から



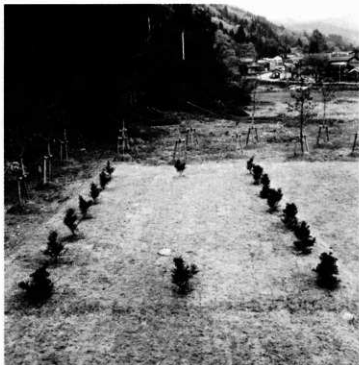
同上 北から



下城戸外濠跡整備状況 東から



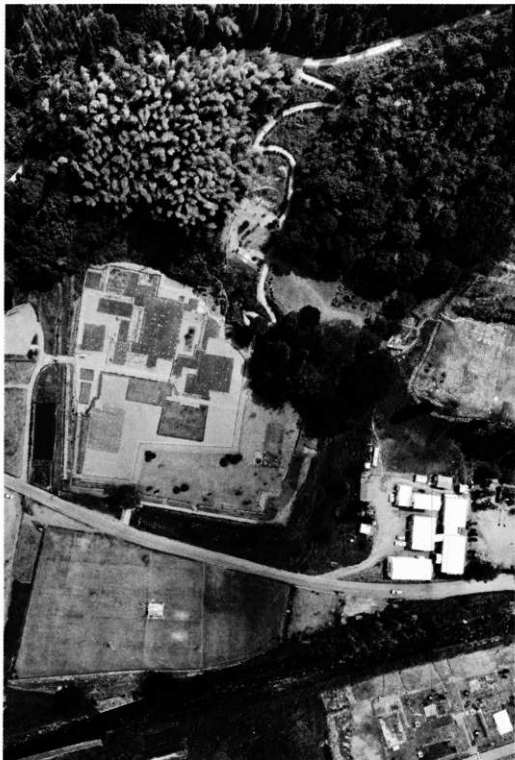
下城戸導水路工 東北から



出雲谷建物跡整備状況
北から



出雲谷園路造成工
西から



花粉分析・植生調査地航空写真 (昭和51年8月25日撮影)



花粉分析・植生調査地 1・2・3・6・7 北から



花粉分析・植生調査地 6 北から



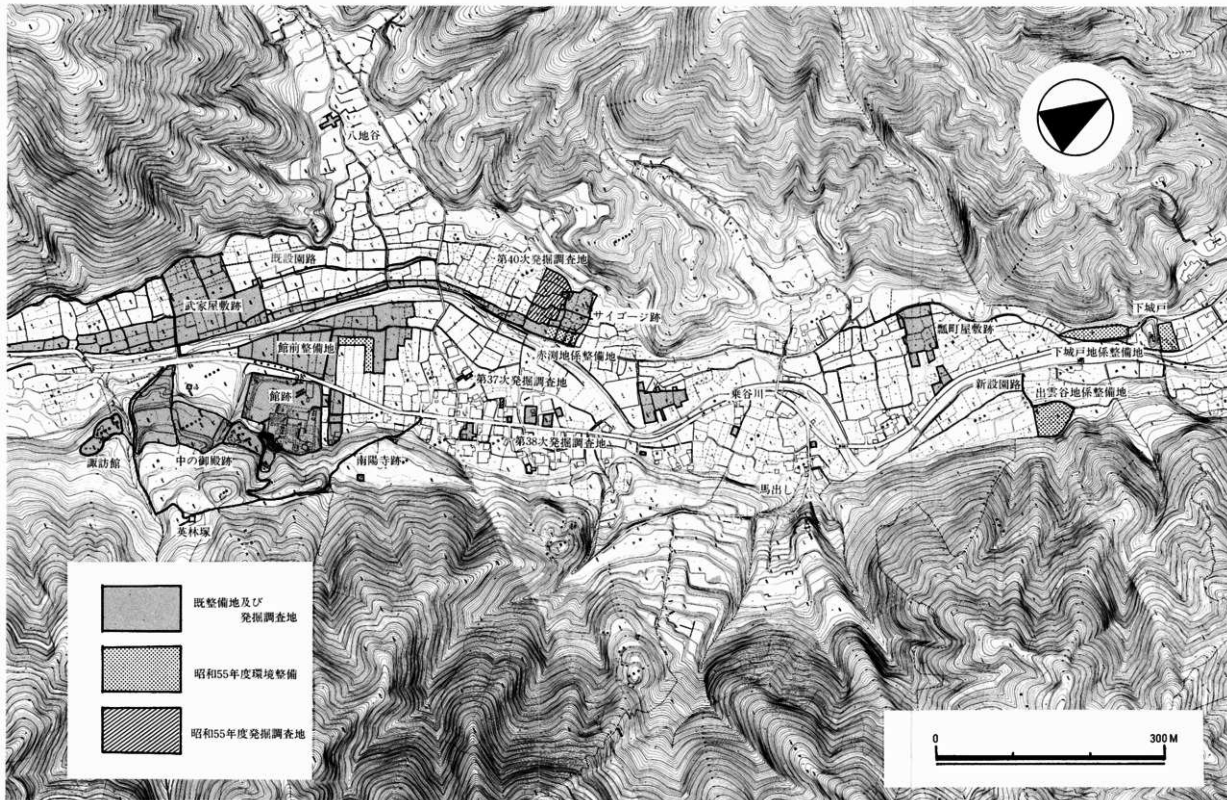
花粉分析・植生調査地 10 西北から

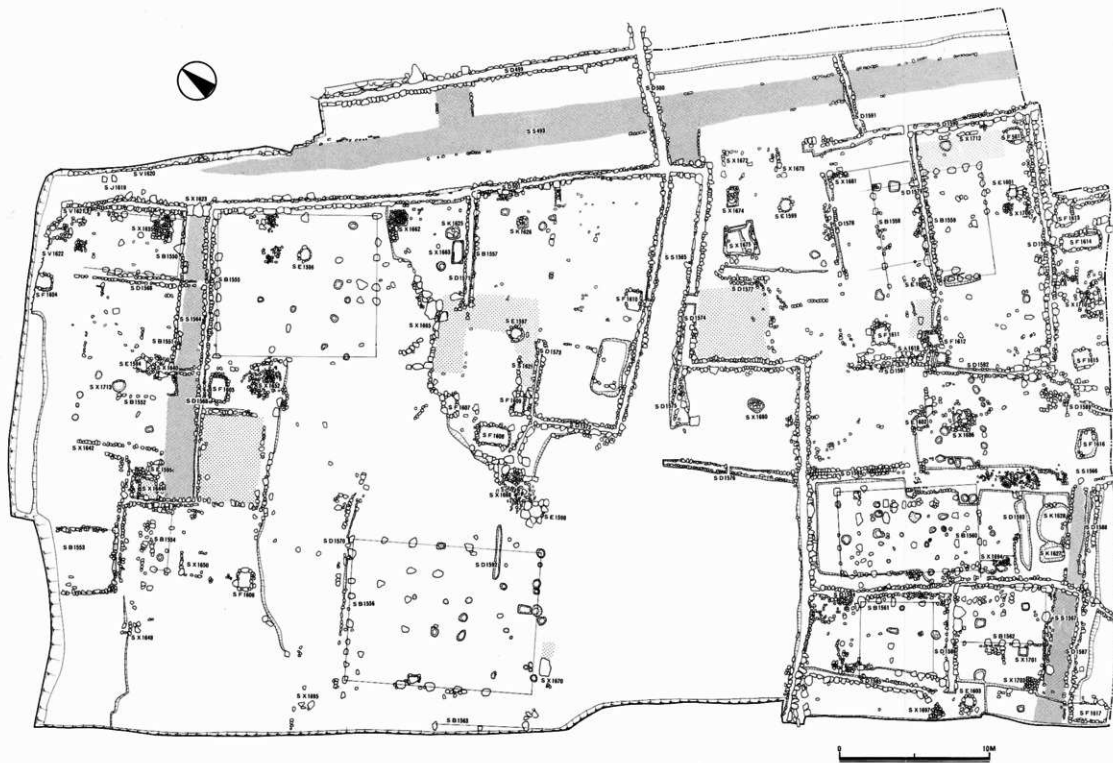


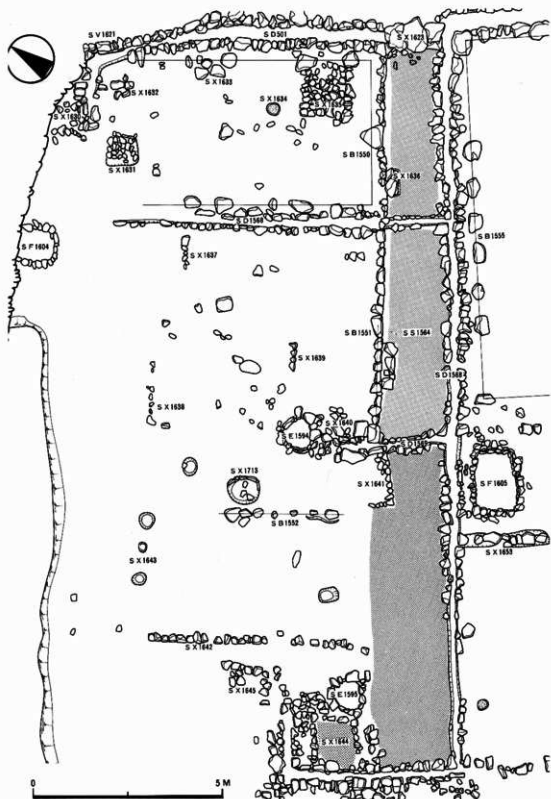
花粉分析・植生調査地 4 西北から



花粉分析・植生調査地 8 西北から

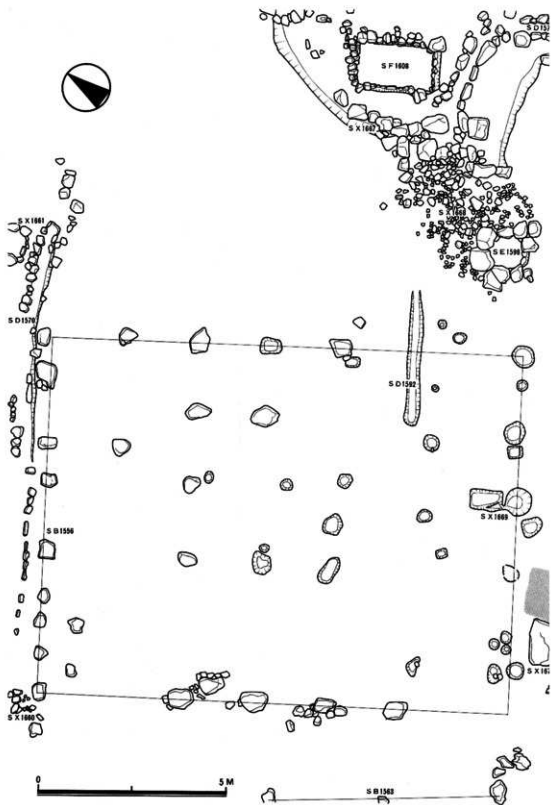


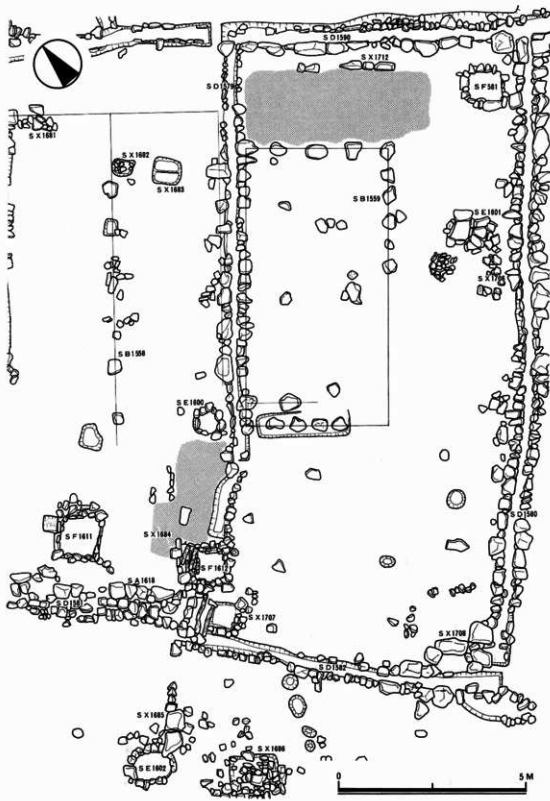




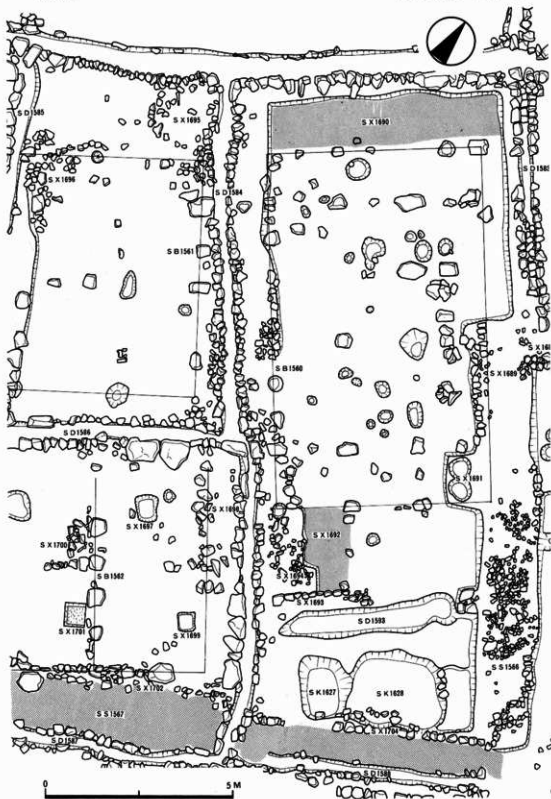
第4図

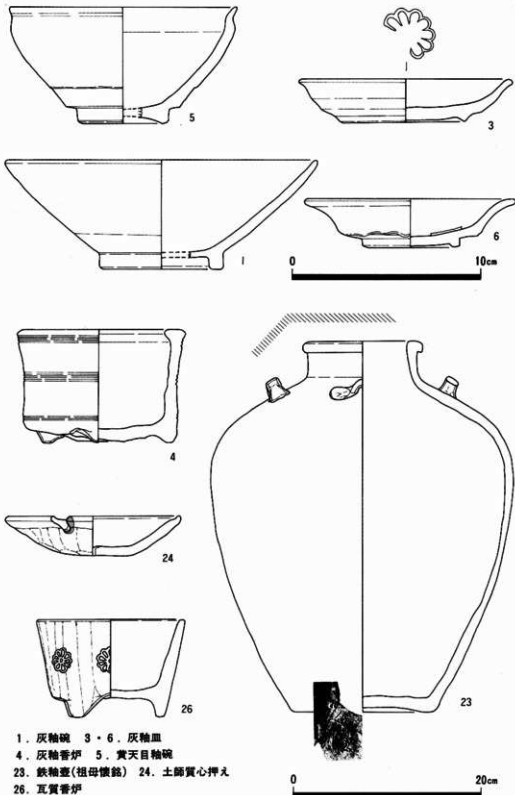
第40次調査・遺構(2)





第6図

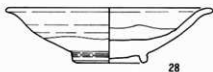




1. 灰釉碗 3・6. 灰釉皿
 4. 灰釉香炉 5. 實天目釉碗
 23. 鉄軸壺(祖母懷銘) 24. 土師實心押入
 26. 瓦質香炉

第8図

第40次調査・遺物(2)



28



29



30



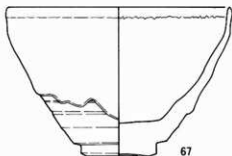
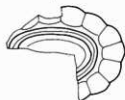
31



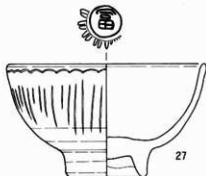
32



33



67



27



34

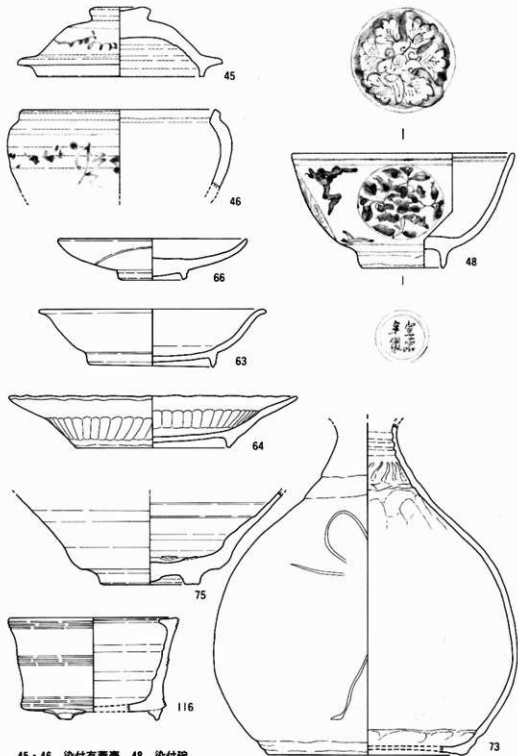


27. 青磁碗

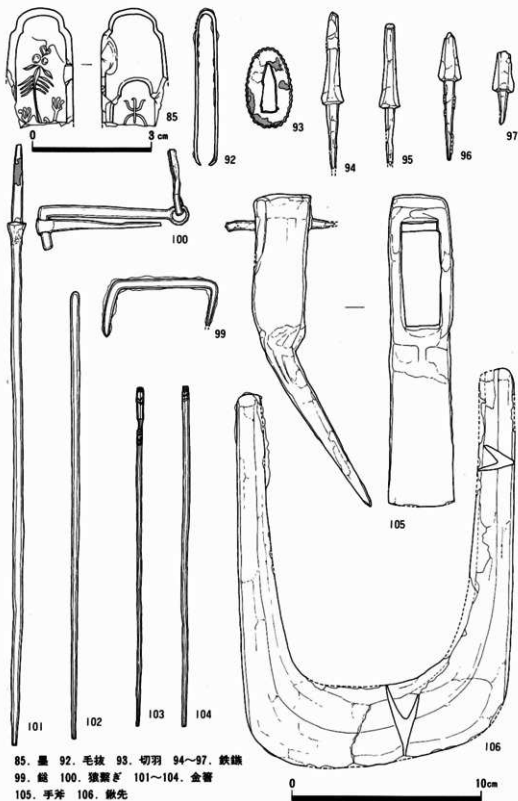
28~31・33. 青磁皿

32. 青磁香炉 34. 青磁鉢

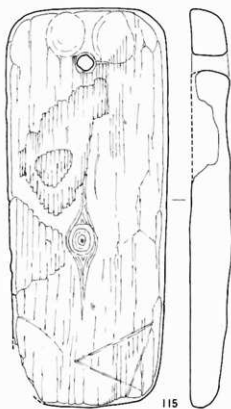
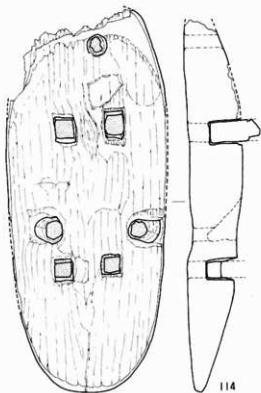
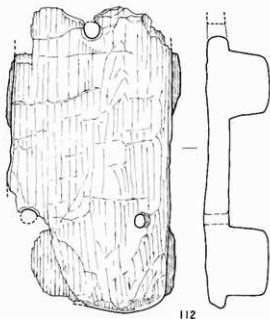
67. 中国製鉄軸碗



45・46. 染付有蓋壺 48. 染付碗
 63・64・66. 白磁皿 73. 朝鮮製舟德利
 75. 朝鮮製蘭堂茶碗 116. 須惠質香炉

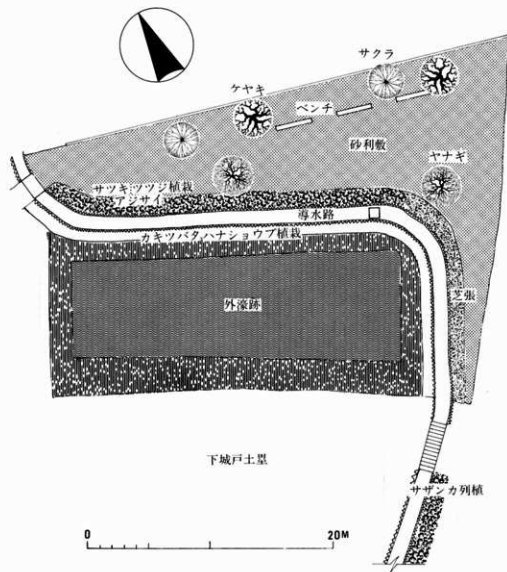


85. 墨 92. 毛抜 93. 切羽 94~97. 鉄針
 99. 針 100. 鬚繫ぎ 101~104. 金簪
 105. 手鏡 106. 櫛先

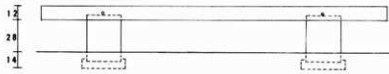
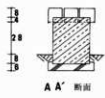
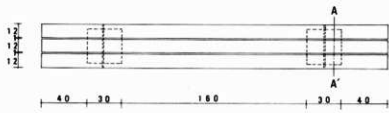


108・109. 将棋の駒 110・111. 木櫛
112・114・115. 下駄

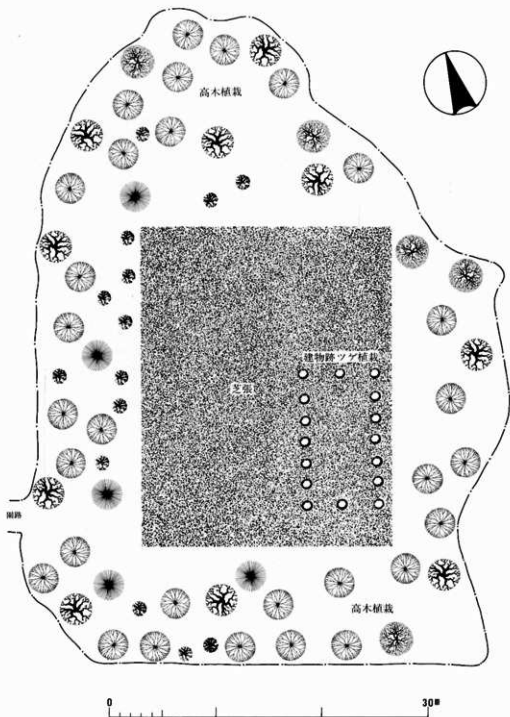
0 10cm

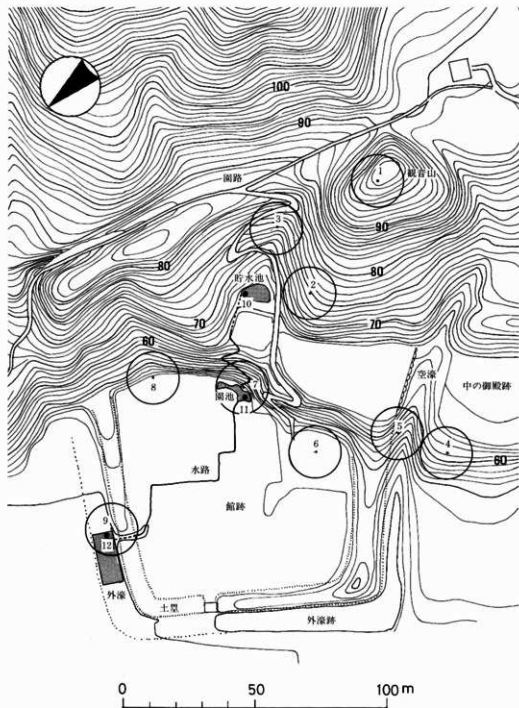


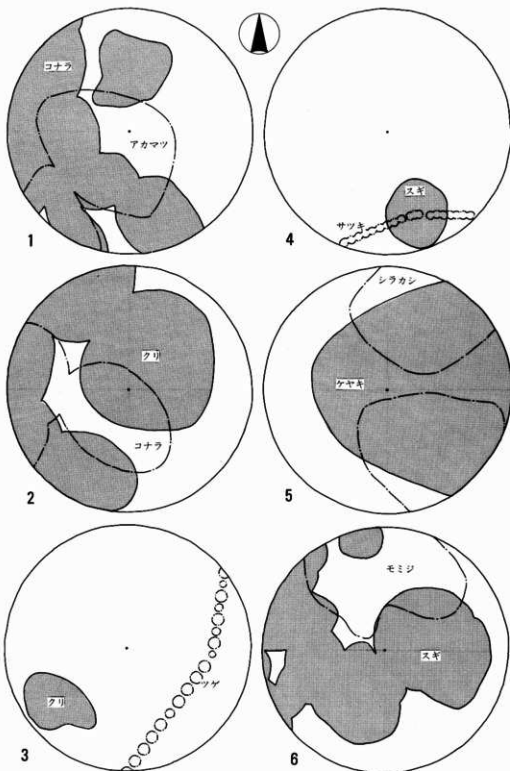
下城戸土塁

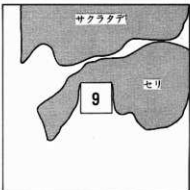
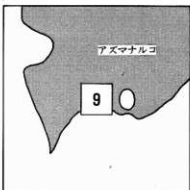
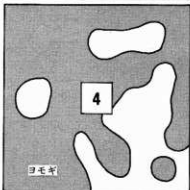
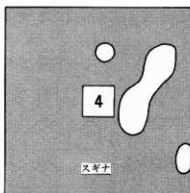
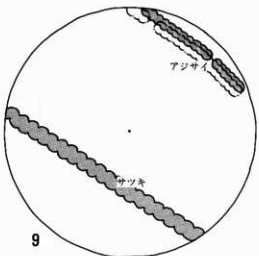
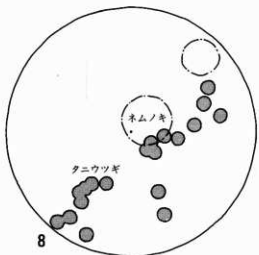
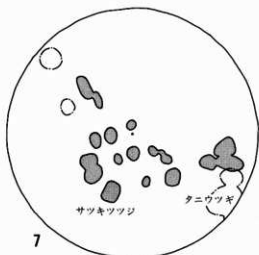


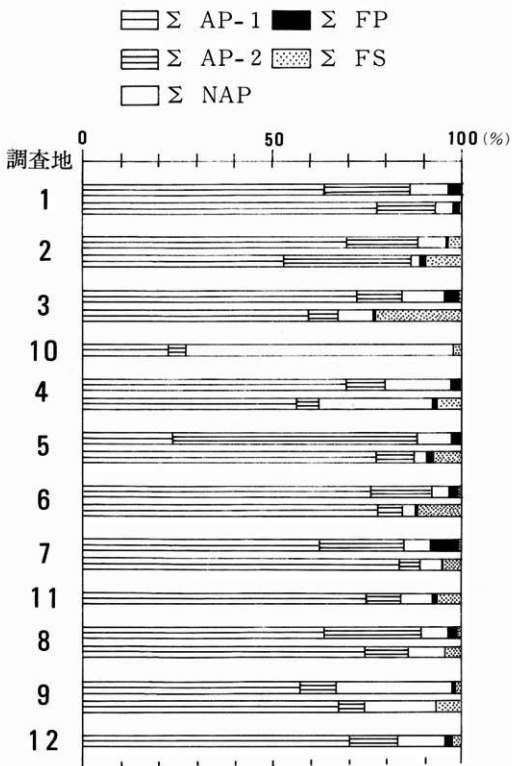
ベンチ工図











特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 Ⅱ

— 昭和55年度発掘調査整備事業概報 —

昭和56年3月31日

編集発行 福井県教育委員会
朝倉氏遺跡調査研究所◎
印刷 創文堂印刷株式会社

無断転載を禁ず